

それでも 希望は 労働運動

ハ・ジョンガン著

ハ・ジョンガンの『それでも希望は労働運動』は
労働問題を自らの問題ではないと考えている
労働問題に対する理解が特別に深くない
そんな普通の人たちを対象にした本です。

労働者でありながら自分は労働者ではないと思っている人たち
家族の中に労働者がいるのに
労働問題は自分とは別の、関係のない問題だと思っている人たち
労働問題は民主労総・韓国労総だけの問題だと思っている人たち
労働運動は労働者にとってだけ有益で
社会には有益ではないと考えている人たち
そうではあっても
自分は客観的で合理的な思考をしようとする人たち……
そのような人たちが偶然にこの本を読んで
『あー、このように考えることもできるな』と
理解できるようにしようという思いで構成しました。

ハ・ジョンガンは 1955 年に仁川で生まれ、1 年の内の 300 日以上、全国各地を回って労働教育をしています。

現在は、ハンウル労働問題研究所所長、ハンギョレ新聞客員論説委員、ソウル地方労働委員会の公益委員、ソウル中央地方裁判所の調停委員、仁川大学講師、韓国労働教育院客員教授、労働者教育センター教育委員などを務めています。以前には仁川キリスト教都市産業宣教会実務者、(社)韓国産業安全保健教育研究センター所長、ハンギョレ労働教育研究所の研究員などを経験しました。1994 年に「遅すぎて会った人々」(「いつも胸が震える初めてです」)で、第 6 回全泰壺文学賞を受けたことを、人生で最も大きな栄光だと言っています。

労働運動を批判しようとするなら

労使が同等だって？

比較的公正だという評判の某日刊紙が『双生の企業経営』というテーマで野心に満ちた企画記事を始め、「新年を迎えて、労働者も使用者も揉め事と対立から離れて、対話と妥協で『共に生きる』枠を見い出すべきだ」と、その趣旨を説明しました。続いて、労使が今のように自分の立場だけに固執すれば、その道は果てしなく遠くなっていくしかない」と書きました。

この言葉には、直ぐにはケチを付けようがないように聞こえますが、よく考えてみると、労使が互いに対等な立場である場合だけに相応しい表現です。このような表現は、労使関係の責任が労使双方に同じようにある時にだけ使える表現です。揉め事と対立の責任が誰にあるのか、自分の立場を守ることだけに熱心なのはどちらなのか、上の言葉だけからではほとんど理解することができません。

代議員選挙を前にして重要な計画を立てていた労働組合の幹部が、一時期連絡を絶っていましたが、久し振りに訪ねてきました。その間の事情はこうでした。

会社が突然「組合員5人を解雇する」と労働組合に通報しました。正当な解雇の理由を尋ねる労働組合の幹部に、会社の人事労務管理者は、「一旦解雇して、何年か後にその者たちが大法院で不当解雇の判決を受ければ、その時に金で解決しよう」と答えました。

何日か後に、会社が妥協案を提示しました。「労組の代議員選挙で、会社が候補を送り出す選挙区に労働組合側が候補を出さないと約束すれば、今進めている5人に対する解雇はなかったことにする」というのです。解雇を云々した当初から、会社の目的は実は労働組合の代議員選挙でした。

労働組合の会議では激論が闘わされましたが、結局、その妥協案を受け容れることにしました。5人の労働者が解雇されて何年間かの復職闘争を闘うより、代議員の席をいくつか差し出す方が優ると考えたからです。会議を終えて、労組の幹部たちは過ぎた10年間の、御用労組を民主化しようとして経験してきた苦労を思い浮かべて、涙を流しました。

労働組合の執行部を構成する時、会社は再び条件を提示しました。労組の幹部の中から会社が目を付けた者を除いてくれば、専従者の数を増やしてやるというのです。会社は

具体的に労組幹部の名前を挙げて、「この者は絶対にダメだ」と釘を刺しました。全体の組合員数に較べて余りにも少ない専従者の数を増やすことが永い間の念願だった労働組合の対策会議では、再び結論が割れました。結局、会社から目を付けられた幹部が涙を流して、「現場の業務に復帰する」と言ったのを聴きながら、他の幹部たちもみんな一緒に泣きました。現場に復帰した幹部は、労働組合を一番熱心に弾圧する管理者が担当する部署に配属されました。それでも、その労働者はこのように言いました。

「労働組合を離れて現場に復帰することは、実際、とても嬉しい。40年の人生を通して学んだことより、労働組合の2年間に学んだことの方がもっと多いけど、労働組合の活動は率直にとても苦しかった。嫌になった。残っている同志たちにはごめんなさい」と言いました。

労働組合の幹部の近くにいる職員たちが当たり前の進級できないことは、この会社では永い間の慣行でした。人事課の職員たちはまるで軍隊の保安隊員のように、他の職員たちの上に君臨しています。自分たちは月給の何倍にもなる活動費を思うままに使うことができるという自慢話をよくします。その者らの言行には、我々の時代で最も成功した職場人だという自負心がみなぎっています。

我が国で何本かの指に入る大企業で起こっている出来事です。人事労務管理者たちが人間の仮面を被って、今でもこのようなことをやっている時代に我々は生きています。この話に共感する職場の人はたくさんいるでしょう。

我々の労使関係は絶対に同等ではありません。政治家が断食をすれば、記者たちが団体で押しかけ、前職の大統領までが訪ねて行って、「断食すれば死ぬ」という素晴らしい教訓を与えたと、マスコミが時々刻々報道します。しかし労働者がコリアテ・クレーンに昇って、100日を超えて孤独と闘いながら籠城し、10年も前の解雇のために、労働者が煙突に登って命を懸けた籠城を2ヵ月しても、その煙突で新年を迎えなければならないようになって、我が国のマスコミは別に注目しません。

「労使の対立によって国の経済が危機に陥ったと言いながら、相手方に対する責任転嫁だけに汲々とする韓国的な現実」などの表現は、労使が平等な時にだけ使うことができる表現です。外国の成功的な労使和合の事例を紹介しながら「所有と経営を独占しようとする資本家や、自身の権益だけを求める労組に、新しいインスピレーションを投げてやる」と、無理矢理に結論を結ぶものではありません。『両非論』は、ほとんどの場合に正しくありません。

労働運動を批判しようとするなら

労使関係安定の責任

次のような主張を一度よく聞いてみることをお願いします。

「労使関係を向上させなければならない責任は、経営陣に 75%、労働組合と職員に 25% ある」。

「ストライキは信頼の不足から生じるものだ」。

「職員たちの未来を保障するという経営陣の戦略が支障なく推進されれば、ストライキを武器として前面に出すだけではないだろう」。

「韓国の自動車業界は、労使の相互不信によって、このところ問題が多いが、労使間の信頼構築には経営陣の役割と責任が大きい」。

これは民主労総の主張ではありません。GM 大宇自動車のリック・ライリー社長が、GM が大宇自動車の経営を引き受けた後の初めての賃金交渉に関する感想を聴く記者たちの質問に、このように答えました。

最近、これと似たような話をした外国人経営者がまだいました。韓国トヨタのオギソ・イチロー社長もトヨタの労使文化を説明しながら、「労組は経営陣を映す鏡だ。経営陣がちゃんとすれば、労組もちゃんとするようになる」。「経営陣の諦めない努力なくして安定的な労使関係は維持できない」と労使関係での経営陣の役割と責任を強調しました。

一人の参加者がオギソ・イチロー社長に「会社の収益を、再投資と労働者の福祉にだけ利用すれば、株主の不満はどうなりますか？」と攻撃的な質問を投げかけると、彼は「優先的に職員の満足を考えなければ、会社の経営が成功することは難しい。株主も職員の全体的な協力がなければ、自ら投資した会社が利益を出すことができないということを知らなければならぬ」と答えました。長期不況の泥沼でもがく日本で、唯一黒字を記録する企業の骨太の経営者が語った言葉です。

同じような話はまだあります。11 年間の韓国勤務を終えてロシアに帰った BAT コリアのジョン・テイラー社長も記者会見で、「難しい労組は会社が経営を間違ったからだ」と

言いました。

極めて当然なこのような話しを、外国の経営者の口を借りて聴かなければならず、この当然な話がニュースのネタになるということは、非常に恥ずかしいことです。外国の経営者たちが、なぜ最近このような声をめっきり大きくしているのか？ 外国の資本が見ても、韓国社会に蔓延する労働運動に対する敵対感と批判一辺倒の世論の現象が正常ではないと感じているからです。

この間、韓国社会の深刻な不平等構造を招いたことに関して、目をみはるような功を挙げた人たちが、今は正規職と非正規職労働者の差別を理由に、労働運動内部の平等を問題視して攻撃しています。労働者たちは「何が怖くて賃金引き上げ要求をするのか？」、「ストライキをもう一回すれば売国奴になるのではないか？」と、恐れています。

週5日勤務制が法制化される過程でも、昨年まで民主労総の主張を支持していた市民社会団体などが、今年は、労働運動の指導者たちが降り注ぐ豪雨に撃たれながら国会の前で籠城をしても、これといった反応をしません。この間、韓国社会で最も道徳的な優越性を持っていた集団に対して、全社会が背中を向けるこのような現象は、決して正常ではありません。

韓国の労働組合の活動のスタイルに多少拗ねているような面があるとしても、それは労働者の人格や性質のためではありません。不純な背後勢力が純真な労働者を操縦するため、大したことはありません。私たちの社会の深刻な不平等構造と、企業の非合理的な労務管理の慣行の方にもっと大きな責任があります。

労使関係の安定は、労働者の要求を抑え込む方法では上手くいきません。労働者の、どう考えても搾取されているという感じが減り、少なくとも、やり甲斐のある生き方ができると感じられる経済構造が作られなければ、労使関係は安定しません。労働者を責めるキャンペーンでは作ることはできません。賃金が上昇する速度よりも社会の不平等構造が深まる速度の方が遙かに速い状況では、不可能なことです。労働者の賃金引き上げと福祉の向上への要求は、労働者個人の生活の質を向上させるという古典的な意味だけでなく、我が国の経済の構造的な悪循環を改善するという側面から理解すべきです。

労働運動を批判しようとするなら

むやみに忠告をしないように

財閥企業のデパートで働き出して、1ヶ月目に解雇された人がいた。そのデパートに直接雇用されたのではなく、デパートに施設管理の担当者を派遣する委託会社に所属するいわゆる「委託労働者」であった。幼い時にポリオを患ったために、片方の足が不自由な障害が残ったが、冷凍機を管理して蛍光灯を交換するなどの業務を行うには何ら支障はなかった。就職してから1ヶ月で解雇される何の理由もなかった。

会社もこの労働者を実際に解雇しておいて、他の売り場に就職させようと面接を手配したり、他の職務を与えようと努力したが、最終的にこの労働者は解雇された状態で、賃金を一銭も受け取れないまま2ヶ月を超えていた。実に奇妙な事件だった。労働者にはそれらしい解雇の理由が全くなく、会社としても敢えてこの人を解雇する気持ちはないように見えた。そうでなければ、他の仕事を探してやろうと2ヶ月間も苦勞をするはずがない。しばらくの間あれこれと尋ねてみたが、容易には理解し難い事件だった。私はもしかしたらと思って最後に尋ねてみた。

「もしかしたら、この人が派遣されて働いていたデパートの位の高い人が、『お客様が行ったり来たりする売り場で、障害者があのように足を引き摺って働いていると、見た目が見苦しいので他の人に変えてください』というような指示があったのはないですか？」

委託会社からきた責任者は、ためらいながら答えた。

「実は・・・そうです」。

私はしばらく言葉を失った。後で友人にこの話をしたとき、友人はこのことにいきなり怒り出した。

「この、人でなしめ……」。

誰もが知っているように、私たちの社会には「障害者の問題」もあり、「労働の問題」もある。この社会での障害のある労働者は、これらの2つの問題を二重に経験しなければならない。

「今まで、他の職場ではどうでしたか？」

私の質問に、その障害者の労働者は答えられなかった。

「前に他の仕事をしたことはありましたか？」

その質問にも、彼は答えられなかった。そういうことだ。今の年齢になるまで、その人にとってきちんとした職場は、その百貨店が初めてだったから……。しばらくして、彼は震える声で答えた。

「それでも……私はね……ボイラー技能長の資格も持っているんです。……冷凍機産業技士の資格証もあります」。

それ以外にももう一つの資格があると言ったが、その言葉は、私が知らないせいで聴き取れなかった。私が知らない資格だった。技能長、それがどれ程取り難い資格なのか。私のような者は今から死ぬまで努力しても、その資格を取ることは難しそうだ。産業技士の資格も甘いものではない。普通の人の一つ取るのも難しい資格を三つも持っていながら、その障害のある労働者は、未だにまともな仕事に就くことができなかったのだ。それが「腐りきった」私たちの社会である。

せっかくその気になってデパートに「ショッピング」に行ったのに、障害のある労働者が働いているのを見ると、「あー、気分が悪い」と考えるしかないのが、なんと私たちの社会のレベルか……。障害のある労働者が働く姿を見て、人々がむしろ「あー、この会社は障害者に仕事を提供する、とてもまともな会社だな」と考えられる社会はいつ来るのか……。百貨店の管理者が、売上をわずか数ウォンでも多く上げるために、障害のある労働者を追い出さなければならないのは、その管理者の道徳のレベルが低いせいか、それとも資本と労働の激しい対立の構図が生み出した私たちの社会の矛盾のせいか……。本当にいろいろと考えた。

困難の中でも骨を削る努力をした末に、これ見よがしに成功した偉大な障害者については、マスコミは絶賛する。そして私たちの社会の教育のある指導層は、その障害者のサクセス・ストーリーを話して、人々に忠告する。

「さあ、何を恐れているのか？ 今から始めましょう。この人はそのすべての困難を見事に克服しているではないですか？」

これは正しいことではない。障害者にとって、ある意味では怖いだけの世の中をそのままにしておいて、勇気を持つと忠告することは決して正しいことではない。ソウルの地下鉄の方背駅のプラットフォームに、未だにその文章が残っているかどうか知らないが、外国のある聴覚障害者の女性が 20 年間、血の滲むような努力をした結果、世界的な打楽器奏者になったという感動的な内容だった。その女性は演奏をする時には裸足で舞台上がるの

だが、それは足の裏で感じられる床の微細な震えで太鼓を聴くためだという。今は空気の微細な流れでも、普通の人よりもはるかに繊細に太鼓の音を感じることができる境地に達したという。どのように素晴らしい人なのか。ある小説家が書いたその文章もこのように結んでいた。

「何が怖いのですか？ 直ぐに始めてください」。

私は、人影もまばらプラットフォームの椅子に座ってジックリと考え込んだ。そのようなサクセス・ストーリーが一方的に強調されていることが、釈然としないと感じられる理由は何だろうか。あれ程厳しい境遇の障害者もあんなに見事に成功しているのに、それより遙かに難しくもない条件であなたが成功できないのは、怠けたりボーっとしていたからだという、密かな嘲笑がその文章に隠れているのではないかと。私たちの社会の矛盾した抑圧構造を、個人の不誠実さで隠蔽したいという不純な陰謀が、知らず知らずにその文章に隠れているのではないだろうか。

誤解がないように願う。厳しい環境で成功した人たちの涙ぐましい努力を、軽く見ようというのではない。障害者の問題や労働問題は、最終的には私たちの社会の「構造」の問題で、「個人」の問題ではないと言いたいのだ。

1982年だったか……。市内バスのガイドと小さな集まりを設定したことがあった、その年に、ある市内バスのガイドが名門大学に合格するという痛快なことが起こった。市内バスのガイドは、夜中の1時まで働いて4時に起きる生活をしていた。二日働いて一日休むが、バス会社によってはガイドが足りず、実際には週に一日休むのも難しかった。ガイドがいた時代に市内バスに乗った経験のある人は、記憶を一度再確認しよう。ガイドのどんな姿が記憶にあるか……。バス停とバス停の間の短い時間に、ガイドは立って居眠りをした。そのように難しい状況で、合間を見て勉強して名門大学に合格したのだから、そのガイドはどんなに優秀な人なのか。あらゆるマスコミが「大騒ぎのブルース」を踊ったのも当然だ。私たちガイドの小グループでもその話が出てこざるを得ず、一番若いガイドがその話を聞いて吐き捨てるように呟いた。

「そうできなかった人は、みんな恥ずかしい人なのか」。

若いガイドがそう言わざるを得なかったのはなぜだったのか？ あらゆる苦難に勝ち抜いて名門大に合格した優秀なガイドへのマスコミの一方的な賛辞の中で、その若いガイドはどんな言葉を聞いたのだろうか？

「あの人は、あんなに見事にやり遂げたのに、あなたはなぜできないのですか？ あな

たが成功しないのは、あなたが怠けたりボーっとしていたせいで、あなたを取り巻く環境のせいじゃない」。

夜中の1時まで働いて4時には起こらなければならないガイドも、1科目当たり1ヶ月に1千万ウォンを出して課外授業を受ける狎鷗亭洞^{アムグジョン}の学生と全く同じように勉強することができれば、その言葉は正しいかもしれない。しかし、ガイドが財閥の娘と対等に競争できるということは「元々から不可能」である。私たちの社会の多くの労働者が直面する問題は、「構造」の問題で、「個人」の問題がないのである。「構造」が変わらなければ「個人」がいくら努力しても問題は解決されないだろう。

今年の受験シーズンでも、間違いなくいくつかの大学で障害者の脱落騒動が繰り返される。水原^{スウォン}のある大学では障害者であることを理由に面接で落した学生を、マスコミの叱咤に勝てず、結局合格させるということもあった。しかし、その学生が「大学に通っている間はどんな不便も甘んじて受け、学校当局にどんな施設改善要求もしない」という覚書を取られたというくだりになると、これはもうほとんどブラック・ユーモアだ。

障害者に「何が怖いのか？」と忠告できる人とは誰なのか？ 「できないから、しないのではなく、しないから、できないのだ」と敢えて言える人は誰ですか？

車椅子に乗って通いながら、アクセサリーを売って生計を維持していた障害者が、「ソウル市長、これからはソウル市内の道路の段差を全部取り除いてください」という遺書を残して自殺しなければならないのが、「クソッ」私たちの社会だ。その世界を少しでも平等な世界に変えるためには指一本も動かすことなく、障害者と労働者に「勇気を持ちなさい」と忠告する偉い指導層に対して怒ろう。

労働運動を批判しようとするなら

市民活動家に聞きたい一言

私が^{ソソソソソ}聖公会大学の労働大学講座を申し込んだということを知って、ある後輩は私に次のような手紙を寄越した。

「ハ・ジョンガン先輩の学究熱は10回賞賛しても足りませんが、今は学ぶ時ではなく、これから教える内容を準備しなければならない時です。その前に、今直ぐに、目の前に急いで消さなければならない火がとてとたくさんあります。未来を開くのは学習ではなく、研究と討論によっても可能です」。

その後輩の問題提起に対する弁明をかなり前から頭の中で考えてきたが、今日少し時間ができたので手短かに整理する。考えてみれば、敢えて『弁明』することもない。私の考えもその後輩と同じだからだ。私は^{ひと}他人から『言い過ぎだ』という批判を受ける位、何時も強調してきたのも、実はそのような内容であったので。

80年代のように「今日捕まるか？ 明日捕まるか？」といった緊張感の中で鉄パイプを準備しなければならない労働者たち、^{ヨソサン}龍山駅の構内にある高さ30メートルの鉄塔のてっぺんや、^{ソソナム}城南公団のアスファルトの道路にテントを張って1ヶ月超えて座り込みをする労働者と、「一週間で永いな」と言いながら会わなければならない生活をしながら、のんきに「勉強でもしてみるか」という考えだったら、それは先ず、私自身が受け容れられない。

聖公会大学の労働大学は名前は『大学』でも、私がハンギョレ新聞社で行っている『労働教室』と同じ種類の労働講座だ。^{コリョ}高麗大学校の労働大学院や聖公会大のNGO大学院のような『制度圏の教育過程』とは格が違う。毎日会っている労組の幹部とそこでまた会うだけだ。だから後輩よ、私が『大学』に行ったからと余り怒らないように……。

ところで、その後輩の心配は全く根拠がないのではなく、講座に何度か参加して私は非常に深刻な悩みにぶつかった。そこに集まった労組幹部- 今でも現場の組織で肩書の一つずつ持っている名実共に『活動家』たち- が、次第に労働運動の『ストア学派』になっていくことだ。

かつて80年代の初めに『夜学批判』で提起された問題点もそれと似たものだった。労働者が夜学の心地よい雰囲気ですべての心を奪われ、今に現場さえ奪われる……ことになっ

てしまうだろう。労働大学に参加する労働者も心の中心が、『現場』から徐々に『労働大学』に移って行くのが目に浮かぶ。心が移って行けば、活動の中心まで移って行くのは時間の問題だ。授業の半分以上をさぼっていながら、講義室に座っていると、なぜかずっとその問題が頭から離れなかった。

教授陣の講義内容が『とても』素晴らしかったせいも、『政治経済学』の講義を聴くと、そこに集まった労働者は『今までしてきた活動をしばらく置いて、政治経済学の勉強をキチンとすべきではないか』という不安を感じ、『韓国資本主義』を学ぶと、『こんなに毎日を賃上げ交渉に命を賭けて闘うのではなく、韓国の資本主義を正確に理解するために、しばらく活動を先送りして勉強に集中すべきではないか』と悩むようになるということだった。

私たちが踏み出す一步を力付けようと集まった人たちが、自分たちの労働運動に対する絶え間のない反省に苦しめられて、却って力を失うのだ。これをどうするか……、私は暇さえあればこの人たちに、「ここで学んだことが私たちの武器になるのに寄与できないのなら、私たちは労働運動をあきらめるべきだ」と話すしかなかった。

このような雰囲気は、何日か前に行われた参与連帯の朴元淳^{パクウォンスン}弁護士の講義時間に、より一層顕著だった。パク・ウォンスン弁護士がその日に話された一字一句の正確な言葉については、再び説明しない。

その日の雰囲気は一言で言うと、『華やかな市民運動の勝利と惨めな労働運動の敗北』が、始終一貫して比較される席であった。驚くべき勝利を可能にした参与連帯の選挙戦術と、一所懸命に闘うほど市民から非難されるだけの労働者の旧態依然とした闘争戦術が比較された。参与連帯の会員たちは1千人が集まっただけで世の中を変えられるが、労働者は10万人集まっても世の中は変わらないという、『理解できない』現象が比較された。

私たちは講義の時間中ずっと良く分からない重圧感に苦しめられ、質問の時間も、私たちの息の詰まるようなそのイライラ感を論理立てて説明できなかった。

「労働者もみんな市民なのに、なぜ市民団体に加入しないのか」という叱責に、「市民団体の会員たちもほとんどは労働者なのに、なぜ自分が所属する労働組合と労働運動に関しては無関心なのか」と、正面から反論できなかった。私たちにはそれに相応しい能力がなかった。昔から私たちの力はそうしたところから出てくるものではなかったからだ。

司会者が「最後の質問を、後一つだけ受ける」と言った時、私は我慢できずに手を挙げた。同時に他の参加者の一人も手を挙げた。私は直ぐに「私は結構です」と言ったが、私

の後の方から誰かが「二人の話をどちらも聞きましょう」と言った。誰か知らない彼の話の中に、私に対する『一抹の期待』が滲んでいると感じたとすれば、私の自己満足か。

私の発言の順番になった時、私の声はほとんど震えていた。

「質問というよりも、一つお願いがあります。ここに集まった人たちは自分の活動の中心を労働運動に置いている人たちです。労働運動を少しでももっと上手くやりたいと、この場に集まったのです。今日の講義を聞くと、あたかも市民運動が私たちの社会を改革できる、より本質的な運動のように感じられて、私たちみんなが労働運動をあきらめて市民運動に行かなければならないのではないかと悩むほどです。しかし、階級闘争としての労働運動が、依然として私たちの社会に必要なだということを、市民運動とは差別性を持つ労働運動が、今のこの時代にも依然として重要だということを、市民運動家の口から一度聴きたいです。これはこの席だからの話です。市民運動家が来て、労働運動をしている人を集めて、『あなたたちの今まで労働運動は間違いでした。私たちの市民運動見て下さい。どれ程上手くやっているか?』と話しをする、そのような場ではありません。お願いします。『あなたたちがやっている労働運動も重要なことだから、引き続き熱心にやって下さい』と、先輩市民運動家の口から一度言って下さい」。

尊敬するパク・ウォンスン弁護士でなかったとすれば、(パク・ウォンスン弁護士と一緒に仕事をしたことのある人は、ほとんどがその弁護士を尊敬していました。一緒に仕事をした人が尊敬する人……本当に尊敬をされて当然な人なのでしょう。)私は「ここはあなたが『敢えて』そのように言うべき場所ではない」と言おうとしたのです。『敢えて』という単語が喉まで出て、飲み込みました。

パク・ウォンスン弁護士はついにその話をしませんでした。むしろ「私の話がそのように聞こえたとすれば、私が今日ここにきた目的を達成したことになる」と笑って受け止めました。「参与連帯への加入願書持ってきたので、たくさん加入して下さい」とまで言いました。

深夜、講義室を出て行く時、誰か私に近付いて来て話しました。「ハ所長さんの最後の質問がなかったら、私は今日、家に帰って寝られなかったでしょう」。

また他の人が独り言のようにつぶやく声も聞こえた。「ここをどこだと……、市民運動をする人が来て、労働運動の悪口を言って、エイ、くそつたれ、このままには……」市民運動と労働運動は必ず出会わなければならない。しかし市民運動は(未だ)階級闘争ではない。

労働運動を批判しようとするなら

もう一日のんびりするというではありません

電灯が一つもなく、真っ暗な無人の研修院の駐車場で帰るための準備をしていると、闇の中から突然黒い影が一つ現れた。

「すぐに出られますか？」

「はい」。

「どこまで行かれますか？」

「^{インチョン}仁川です」。

「ウーン……。では一緒に乗せてもらえますか？ 妻が病気だという連絡がきました」。

「どこまで乗せて差し上げれば良いですか？」

「このまま行って、どこでも都合の良い所で降ろして下さい。では労働組合の執行部に話してくるので、ちょっと待っていて下さい」。

彼は人たちが集まってがやがや言っている修練場の方に急いで走って行った。

昼間に修練会の場所を探しながら見ると、森は結構うっそうとしていて、道も陰しく『深夜に一人で帰ろうとすると、かなり怖い山道のような道だった』が、道連れができて本当に幸いだった。深夜に暗い森の中にある修練会場から一人で帰らなければならないときが時々あるが、その度ごとに本当に恐かった。

何時だったか、一度は^{フアスン}和順の安養山の裾で、夜 12 時頃に、一人で舗装されていない道路から抜け出すのに、四方に全く灯りが一つもなく『一体どれ位まっ暗なのかを見てみよう』と、ちょっと自動車の灯を消してみたところ、実際、目の前の運転台さえ見えない程だった。「暗いということは、固体の質感で周辺を覆う」という表現が本当に実感できた。30分ほどで森の道から抜け出して、遠くにこちらに向かってくる車の灯りが木の間からチラチラと見えたが、その灯りがこんなにうれしいことはなかった。

車一台だけがやっと通れる森の間の小道で、小さな霧の塊りが人の膝位の高さでふわふわと漂っている時もある。自動車のライトを受けて白く光るその小さな霧を見る度に、その霧が丁度一人の魂の大きさのような気がする。ある時は、小さな霧の塊りが二つ並んで浮かび、私の前で道を横切って渡ったりもする。死んでも、どうしても手を離すことがで

きない仲の良い兄妹の魂のような気がして、後頭部がズキズキした。そのような恐ろしい想像が、私の意志と関係なくやたらと思い出されて、その度ごとに私の車の後部の座席に誰かこっそりと入ってきて座っているのではないのかと思って、ルームミラーを度々覗いて見たりもする。『今夜もかなり怖そうだな……』と覚悟していたが、本当に上手くいったと思った。

1分も経たずに帰ってきて、私の隣の助手席に手ぶらでパッと乗ってきた彼に尋ねた。

「修練会に来て、荷物もないようですが、手ぶらできましたか？」

「カバンを一つ持ってきましたが、後で友達がちゃんとするでしょう。なにか？」

「なぜそういうことまで心配するのか？」とでも言うように、大したことではないように話す彼の答えには、友人に対する信頼が滲んでいる。尋ねた方がバカだったように凹む。高速道路の料金所の入口まで行く一時間余りの間、彼と私は休むことなく話をした。彼は小さな会社に通う労働者だと言った。何日か前に社長が変わったが、その社長が会社の雰囲気をよくするからと、職員と一緒に登山に行こうと言った。彼の状況は可成り厳しかったが、その登山に行かなかったら初めから社長の憎しみを買って、不利益に遭うかと思っ

てやむを得ずに参加したが、なんとその時に大きな怪我をしてしまったということだ。社長が楽しく遊ぼうと思ったことが、労働者にはそれこそ『苦役』になることもある。

「この頃はどこともみんなたいへんでしょう。妻を連れて病院行く時間ありません。運動がとりわけ好きなその会社の社長は、『少々我慢して良くなる病気なら、そのまま我慢する方が健康にも良い』と話したそうです。私は本当に情けなくて……。そういう話を聞くと『アー、もし行く途中で倒れて死ぬようなことがあっても、どこまでも一緒に行っ

てやろう』という意地が出てくるのですね。社長の奥さんが病気だとしても、社長はそのように言うのでしょうか？」

「だから、早く週5日勤務制が実施されなければ」と私が相槌を打ったところ、彼は本気になって受け止めた。

「週5日勤務制が実施されれば、その時は病院行くのに問題はないですね。私は人が集まるのが大好きなのです。引っ越ししても住む町内ごとに早起きサッカークラブを作った程です。だから私は引っ越しする度に、家の近所の学校の校長先生がどんな人なのか非常に心配になります。校長先生がどんな人かによって、学校の運動場を使うときにもものすごく大きな差がありますね。責任を負いたくない校長先生にぶつかると、学校の運動場を一回使用する度に、その苦労は話にもなりません」。

彼は自分が働く部署に集りを一つ作ることが、かなり以前からの夢だと言った。努力して、もうかなり永くなったけれども、人たちが誰も意欲を出せなくなっていて、IMFが近付いた後からは、無理に話も出せない状態だと言った。

「その集りが何をするのかは関係ありません。人が好きだということなら、私は何でもする自信があります。私は本当に人が集まるのが好きでね。そんなふう集まって活動をすれば、一生の友人になるのです。冠婚葬祭がある時に焼酎の一本も持って訪ねて行って、喜びも悲しみも共に分けて生きていこうということです」。

彼はさらにこのようにも話した。

「週5日勤務制が施行されさえすれば、その集りを土曜日ごとに、会社に出勤してしなさいと言われても、やる自信がありますから」。

その労働者を見慣れない都市の暗い通りで降ろして、一人で家に帰って私はじっくりと思いに浸った。そうだ。『労働時間短縮』、そのことだけでも、それは私たちの生活の質を向上させる重要な要素になる。しかし、もっと重要なのは、労働時間短縮によって、私たちは生活の質を向上させるために努力できる空間を準備できるようになるということだ。『労働時間短縮』がまた別の『労働時間短縮』を生み出すということだ。「労働運動の歴史は、労働時間短縮の歴史」だと言ったことはなかったか。

『週5日授業制』も同じだ。学生たちが、本当に青少年らしく時間を過ごすことができる一日が必要なのだ。先生がもう少しの時間をかけて、真の教育について悩むことができる時間が必要なのだ。

『公務員の隔週休業制』も同じだ。公務員が集まって、本当に人間らしく出会うことができる一日が必要なのだ。公務員たちにも、堂々と労働組合のために苦勞し、準備できる時間が必要なのだ。それを知っているのも、地位の高い権力者は、これ以上はできないと言うのかも知れないが……。

私たちの『週5日勤務制』の要求を、「家でもう一日のんびりする」という話として聞いてはいけない。私たちは、本当に人間らしく生きることができる一日を要求しているのだ。

週5日労働に対するもう一つの思い

私のこの文章が載ったあるサイトに、判事をしている女性の後輩のインタビューが載った。その記事を読んで、私は後頭部を強く鞭で打たれたような気がした。

読んでみて……。やはり、人は恥ずかしさから学ぶのだ。

問) 週5日勤務制を実施すれば、どんな良いことがありますか。ひょっとして個人的にしたいことがあるのですか？

答) 何人かと週5日勤務制について話したことがあります。その中の一人が、遊びに行きたいのですが、今の月給で、何とかして遊びに行きながら週5日勤務をしようとすれば、月給が上がらなければならない、と言いました。

正しいでしょう。そして一つ考えたことがあります。二日休むことになれば『遊びに行かなければなりません』『レジャー産業を発展させなければなりません』『自己啓発に時間を投資しなければなりません』。こんな話しは実際には、一種の強迫ではありませんか。レジャー産業を発展させなければならない。一種の強迫でしょう。

社会に蔓延している一所懸命に働かなければならないという脅迫が、遊びに行かなければならないという脅迫に変わったみたいです。働かなければならないという脅迫と、遊ばなければならぬという脅迫。

また別の意味では、100メートル競走をしているようです。週5日勤務をして、残りの時間に何をやるのですか？ 家でゴロゴロしても良いじゃないですか。自己啓発しないからといって、何だと言うのでしょうか？ そのまま退歩していても良いんじゃないですか？

私は何もせず、家でゴロゴロしているでしょう。

(私は私の考えを変えることにした。「家で一日中のんびりする」という要求であっても、それが一体どうだと言うのだ?)